

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.208
2021.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第37回 ● 松本彦七郎の遺した今日的層位

松本彦七郎による1919(大正8)年の紆余曲折は、稀少附図となる第41図(土器番号は上段右から1・2・3・4・5・下6、下段右から7・8・下9・10・下11)【出土地内訳は大木貝塚:1、宝ヶ峯貝塚:2、宮戸島里浜貝塚:3・5・6・8・9、瀬澤(おそざわ)貝塚:4・7・10・11】を引き継いだ論文「宮戸島里濱介塚の分層的発掘成績(二)」がここで触れるべき締め括りとなる。坪井正五郎由来の「遺跡の型式」に加えて遺蹟毎の層位による年代細別は、①長谷部言人の「大木式」や大境洞窟調査等動かし難い趨勢に従順となる一方、②自身の調査による瀬澤貝塚・里浜貝塚・宝ヶ峯貝塚の年代細別である各層位間の「土器の型式」同定・比定には顕著な逡巡を認める最終局面があり、人類学教室レベルの「コロボックル考古学」は期待できず、逡巡は釈然としない表現で終わる。

では、最終局面の新たな見解に耳を傾けよう。先ず、「宝ヶ峯下層期(式)」(今日の加曾利B式期等)は、長谷部言人の「大木式」(松本彦七郎の「凸曲線紋縄紋期」)との層位による新古が未明であることから前回の論文では「大木式」の範疇に組み込まれたが、改めて宝ヶ峯貝塚の上層(第一・二層/第三層)の夫々「土器の型式」が長谷部言人命名の「宮戸島上層期(式)」/「宮戸島下層期(式)」に夫々比定される堆積構造を確認した上で、「宝ヶ峯の下層(第四乃至第六層)を以て宮戸島の下層(第十乃至第十八介層)前の一期と見做し、両遺跡を合し全三期を区別する時は今日迄の所最もよく判りたる三標準別を凸曲線紋縄紋期中に得る事となるべし。」「(一)宝ヶ峯下層期(式)。(中略)此処なる第六層は可成りに凸曲線紋縄紋期に近接す。或はその最下部は殆ど凸曲線紋縄紋期との推移相に触るとも見做し得べし。」「(二)宮戸島下層期(式)。(中略)」「(三)宮戸島上層期(式)。(中略)」「(ゴチック体は引用者、

以下同様)との見直しに至るならば、加曾利貝塚の層位的調査と整合し、**山内清男が唯一認める成果**となる。

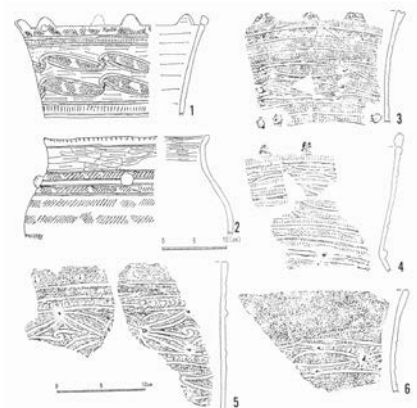
逆に松本彦七郎の逡巡は折々に長谷部言人の指導を得るが如く、遺蹟の層位を既存の「土器の型式」に同定・比定する際に懸念され、特に前回の宮戸島里浜貝塚における層位別に対応する「土器の型式」は、当初「瀬澤式」→「宮戸式」と年代細別されるが、第41図の出土例を標準として新古を検証するならば、今日的には理解できない逆転する層序となる。即ち、**宮戸島出土と図示される第41図8・9の「瀬澤式」壺**(「大洞C2式」の9と「大洞A式」の8)の**属位を、長谷部言人が否定し「宮戸島下層期(式)」と改める状況に疑念は集約される**。何故ならば、**第41図8・9の層位が正しければ、「宮戸島上層期(式)」は「大洞BC2式」~「大洞C1式」等の層位となり、山内清男の大洞編年は属位的に逆転するが、今日的な矛先は松本彦七郎の層位論に対する矛盾に向かう**。

ここで翻るにそもその問題として、宮戸島出土と図示される第41図8・9の「瀬澤式」は、長谷部言人の「宮戸島下層期(式)」を代表しているのであろうか。これが**松本彦七郎の層位論への疑念**であり、資料による核心部分の実態究明が希求されるが、その前に自身が語る弁解の詳細は論文を参照願うとして、最終的には「今は唯瀬澤介塚の或る大部分が若しくは一部が宮戸島下層期と重複するものあらむとだけ暗示し置かむのみ。」と結論付ける。自身による「重複」云々は資料に即して決すべき責任があり、資料による解明をせずに「暗示」のみとする学問的な無責任さに至れば、畢竟、層位による新古の捏造と表現するに相応しい。

こうして松本彦七郎の学史的眞骨頂とされる1919年の活躍は思いの外成果に乏しく、概念語りから離れ資料の実態面から接近する限

り、自身の複数遺蹟の層位論で年代の新古に直接寄与する成果は、「宝ヶ峯下層期(式)」と「宮戸島上/下層期(式)」との上下関係のみである。それにも拘らず、日本考古学において層位による年代細別の道を切り拓いたかの高評が定着するのは、「コロボックル考古学」素養で鍛え抜かれた形態学から松本彦七郎を直接指導でき、「土器の型式」と層位論による年代細別と新古を主導した長谷部言人による当時の強力な配慮が窺え、副手の立場には同調圧力以外の何物でもない、とするのが山内清男を識る大方の見方であろうか。

さて、疑念的である「宮戸島下層期(式)」も公開される(会田容弘(1996)「松本彦七郎博士の層位的発掘の再検討」『古代文化』第48巻第1号)や、里浜貝塚第18貝層が山内清男の大正13(1924)年調査となる福島県小川貝塚との関係で学史的に再注目される。即ち、後期末葉土器群が「瘤付土器」から馬目順一命名「刻文土器」へ移行する単独層位として明らかとなり、層位と「土器の型式」が今日でも有効な学史的資料は第42図のみであり、「**里浜第18貝層式**」と呼び(鈴木正博(2004)「山辺沢式」以前)『福島考古』第45号)、**松本彦七郎の顕彰**としたい。



▲第42図:「里浜第18貝層式」(鈴木正博2004制定)

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 松本彦七郎の遺した今日的層位(第37回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第30回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第201回) 喜友名正弥 …3
■考古学者の書棚 『知っているようで知らない貝の話 特集 貝棘新書』 忍澤成視 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「…それでは 何だ」(第30回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

6. 吉備真備の祖母骨蔵器(和銅元年・罔勝・罔依母夫人の墓誌銘を刻む)・「それでは何だ?はまだまだあった」(7)

前回、吉備真備の故郷が「まがねふく」地とされた…でおわつたが。この言葉は、ふるく『古今集』に「吉備」の枕言葉としてあり、古代以来吉備の地が鉄生産地として知られたことで、今更説明は要しないと思われる。ただここで改めて取り上げるのは、真備祖母の出身が、この生産者集団と強く関わるのではないかとの推察による。それは前回話題とした「富比賣墓地買地券」で馴染みの「矢田部」と鉄生産者との関係でもあるのだ。

話題は少し前に返るが、中国の墓誌で、呼称を「夫人」と記す場合は、当人の出身氏名や個人名を記すのが原則であった。わが国の数少ない女性の埋葬を示す墓誌にも、他にはみな当人の本名があった。再度記すが、最も古い船氏の場合、安理故能、次が本題の「母夫人」だが、続いて伊福吉部徳足、蚊屋忌寸秋庭、紀吉継である。真備祖母の場合は、氏名も本名もない。真備は普段、祖母に対し、ただ「おばば」だったのでは…名が無いことに、むしろ少年の素顔が出たのでは?…この墓誌文面作成に身近な大人が加わりえなかった証明ではないのか、とさえ思われる…。

真備自身が何処で誕生したかは別としても、彼一族の本拠地は、多くの人が思い浮かべるのは、祖母骨蔵器出土地に最も近接して、箭田大塚や周辺に白鳳寺院の集中する地域の一角(現在倉敷市真備町や矢掛町)あたりであろう。地元でもこうした形で宣伝に努めている。それは岡山県西部を北から南へ流下する高梁川の下流域西岸地域なのである。

しかし実は西岸に限られることなく、東岸も含めた一角こそが、吉備中国であり「まがねふく」地だったのである。

吉備での考古学的調査で、日本でも最も古い鉄生産地の1つとされている、高梁川東岸に接する「鬼ノ城」山塊の南裾一角に集中した、鉄器や鉄自体の生産遺跡群がある。実はこの地の一角には、江戸時代末まで、「矢(八)田部」村の地名があったのだ。ここはかつての、備中国府跡とか、現在の総社市名ともなる総社宮に近接する村であった。矢田部といえば真備祖母骨蔵器出土地に近い、真備町出土の「富比賣墓地買地券」を作った本人といえるのが、郷長矢田部益足。

東岸の地の製鉄関係の遺跡群は、近い地点で高梁川に西岸から流入する、新本川流域にも分布する、大規模なほぼ同時期の鉄生産遺跡群と、一体的なものと考えられる。

この西岸すぐの地には秦廃寺社もある。吉備では最古の飛鳥様式瓦と、吉備式といわれる白鳳期の華麗な瓦等を出土する県下では最も著明な寺跡なのである。もちろん東岸にも吉備式瓦を出土する寺々がある。この新本川流域の鉄生産遺跡群地帯は、南背後の山のすぐ南下が真備町、箭田大塚や現在の吉備寺(箭田廃寺址)も眼下の地であり、まさに高梁川を挟んだ両岸域が一体ともいえる地でもあった。

あの富比賣の墓地買地券にでる彼女の氏名は「白髪部」だった。後日、白壁王が光仁天皇と成ったことで、「白髪部=白壁」と読みの類似で地名も氏名も「真壁」と変えられた。その真壁の

地名は、高梁川東岸にあった矢田部村の近くで、今も残る。買地券の「富比賣」さんは、その出身者だったともいえる。「矢田部」とは箭田大塚や小田川流域だけでなく、東岸の主要部分にも残る名称だったのだ。かつては東岸・西岸一帯が、「矢田部」で代表する鉄生産者の集団領域、それらは現在の「矢部・矢(八)・箭田・矢尾・八木」などの呼び名全てを含むのではとおもっている。

「鬼ノ城」の主、新羅の王子との伝承もある「温羅(うら)」と対峙した吉備津彦が、石を立てて楯としたという伝承の、楯築神社(遺跡)は今、倉敷市だが一帯は古墳群のある独立山丘。その中一基の横穴石室墳から、浪形石による精巧な組合式石棺も出土。ここでは四佛四獣鏡をはじめ、各種の遺物を出土し、主なものは東博蔵。この一帯を王墓山という原因にもなった古墳。全くの偶然ながら、その古墳の地主は、「矢尾」氏。山丘の北西裾には「矢部」の地名も残る。この王墓山古墳の東裾には、やはり吉備式瓦出土の寺跡がある。

山丘の東には足守川が流れるが、山丘の北近くで、北西より流入する川が血吸川、楯築の吉備津彦と、鬼ノ城の温羅の戦いは、互いの射た矢が真ん中で当たり勝敗が付かぬため、吉備津彦が2本の矢を一度に放ったことで、一本が温羅に当たった…、その血が流れたというのが、血吸川の名の伝承。やはり「矢」が中心の話だが、鬼ノ城辺りから流れる川には常に、鉄錆びの色が見られたのであろう。

いずれにしてもこの地域一帯が、6世紀後半から7世紀台、強大な鉄器や鉄生産者のバックグラウンドであったことの証明。「まがねふく 吉備の中山…」と歌われる中山は、足守川の東、吉備津神社の裏山のことで、当時としては、最有力の鉄器やその原料生産地のランドマークだったといえよう。しかも当時となれば、吉備氏も多くの分流となり、渡来人も多様、渡来時期も理由もそれぞれに異なったであろうが、その中で、地元勢力と一体化し、実力ある技術集団も成長。六世紀も後半から7世紀、高梁川下流域で、鉾石使用製鉄技術の中に、新たな砂鉄使用なども取り入れた、有力氏族が矢田部一族で、彼らの墓こそが、大和の石舞台をも思わず、巨大横穴石室墳、箭田大塚であり、その後裔こそが真備の祖母の実家ではなかったのか…

間壁忠彦 略歴

1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁葎子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 201

小湊フワガネク遺跡 ～鹿児島県奄美大島

喜友名 正弥

私が紹介する遺跡は、鹿児島県の奄美大島に所在する小湊フワガネク遺跡です。奄美大島は、航路距離で鹿児島港から381km、那覇港から356kmの地点にあり、人口61,256人、面積812.35km²の奄美群島最大の規模を持つ島です。山地が大部分を占め、その山々の間に多くの集落が営まれています。小湊フワガネク遺跡は、奄美大島の東海岸に位置する奄美市名瀬大字小湊に所在し、南北約1kmに広がる標高約9mの大型の海岸砂丘上に立地しています。この砂丘の北半分は畑地、南半分は小湊集落として利用されており、当該遺跡は、その畑地部分に位置しています。

小湊フワガネク遺跡は、平成8年度の砂採取工事の際の立会調査によって発見されました。その後、遺跡の隣接地にある学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」の施設拡張工事に伴い、平成8年度に確認調査、平成9年度に緊急調査が行われています。さらに、遺跡の範囲確認調査が、平成12年度から平成14年度に実施されています。

発掘調査の結果から、小湊フワガネク遺跡は、弥生時代並行期から中世にかけて営まれた複合遺跡であることがわかりました。その中でも、特に注目を集めたのが、6～7世紀頃の古墳時代後期並行期の遺構・遺物です。



▲図1：小湊フワガネク遺跡出土夜光貝匙
(奄美市立奄美博物館所蔵)

この遺跡からは、夜光貝(リュウテンサザエ科に属する大型巻貝)を用いた「夜光貝匙」を代表として、貝玉・貝札・有孔製品等の多種多様な貝製品が出土しました。また、夜光貝匙等の貝製品の製作跡と考えられる遺物集中区が5箇所(調査区11から2箇所、調査区3・12から3箇所)確認されています。この遺物集中区からは、夜光貝匙や夜光貝の貝殻及び貝殻破片、石器、夜光貝蓋、夜光貝蓋打器が集中して出土しました。当該遺跡出土の夜光貝匙は、完形品が少なく、未製品が多いという特徴があり、加工途中で破損したと考えられる状態のものが多く認められました。特に、調査区11の遺物集中区の夜光貝匙は、夜光貝の原貝から割り取った未製品が多く、調査区3・12の遺物集中区の夜光貝匙は、粗研磨段階の未製品が多く認められ、場所によって、製作工程の違いがあることがわかりました。さらに、調査区3・12からは、4m×2m前後規模を持つ掘立柱建物跡4軒が、遺物集中区3箇所を挟むように検出されており、建物跡が位置する部分には遺物分布の空白部分が形成される特徴があります。また、夜光貝の原貝も大量に



▲図2：夜光貝匙の製作跡の様子

出土しており、単に食べかすとしての貝殻ではなく、夜光貝匙を製作するために意図的に確保し、ストックしている様子も明らかにされました。

このように、大量の夜光貝と夜光貝匙を製作する工程の資料が出土しており、6～7世紀頃に小湊フワガネク遺跡では、集中的な貝製品の生産が行われた様子をうかがうことができます。

以上のように、豊富な出土遺物等から、当時の奄美社会における夜光貝の利用実態の一部を解明したこと等から、平成22年8月5日に遺跡面積約25,000m²のうち、12621.13m²が国史跡、平成28年8月17日に出土遺物1,898点が国重要文化財に指定されました。

遺跡の現況は、畑地として利用され、良好な状態で保存されています。その畑地は、土地を細かく方形に区画し、その土地境界にソテツを移植しており、伝統的な農業景観が現在までも残されています。その様子は、奄美のシマウタにも「ソテツめキョロさや古見金久」と唄われています。また、国土交通省の「島の宝100景」では、「小湊フワガネク遺跡群とソテツ群落」として選定され、奄美市の地域活性化事業として実施された「一集落1ブランド事業」においては、小湊集落のブランドとして「小湊フワガネク遺跡とソテツ畑」が選定されています。

伝統的な農業景観は、美しいソテツだけではなく、防風林としての役割や直射日光から作物を守るために被せたり、ソテツを燃やした灰を肥料として活用する方法等、様々な要素が含まれています。この伝統的な農業景観を維持することは、小湊フワガネク遺跡をこれからも保存していくことにも繋がります。



▲図3：ソテツの土地境界の様子と小湊フワガネク遺跡全景写真(城康弘氏撮影)

奄美市教育委員会は、平成30年度から令和元年度にかけて国庫補助事業「史跡等保存活用計画策定事業」を活用し、「小湊フワガネク遺跡保存活用計画」を策定しています。この事業は、史跡の恒久的な保存や将来的な活用整備に係わる計画を策定し、今後の奄美市の施策として実施していくものになります。この計画は、『鹿児島県奄美市 史跡小湊フワガネク遺跡保存活用計画書』としてまとめられ、奄美市ホームページに公開されています。

参考文献：

- 奄美市教育委員会2016『鹿児島県奄美市 国指定史跡・小湊フワガネク遺跡 総括報告書』奄美市文化財叢書8 奄美市教育委員会
- 奄美市教育委員会2020『史跡小湊フワガネク遺跡保存活用計画書』奄美市文化財叢書9 奄美市教育委員会
- 鹿児島県大島支庁総務企画課2020『令和元年度 奄美群島の概況』鹿児島県大島支庁総務企画課

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは與嶺友紀也さんです。

考古学者の書棚

「知っているようで知らない貝の話 特集 貝殻新書」エプタVol.93

奥谷喬司 他／エプタ編集室(2019)

忍澤 成視

1 貝って何？(石田 惣)

貝は、遙か昔から人類にとって身近で、日々の食材、貨幣や装飾品、楽器や染料、建築の意匠など様々に利用され、今なお続くその関わりは非常に長い。身近過ぎる故、深く考えることはあまりないが、改めて見直してみると実に不思議な生物である。貝とは軟体動物、ウミウシ、ナメクジ、アメフラシ、イカやタコも同じ仲間、硬い貝殻をもつものばかりではない。多くが貝殻で身を護っているため、どうしてもそこに目がゆき、またその形態、色合いなどが多様性に富んでいるため、人間にとって利用度も高い。貝類は既知のものだけで10万種以上、祖先は約5億5千万年前、地質年代のカンブリア紀初期には出現し、海洋、河川、湖沼、陸上、深海、浅海、岩礁など、あらゆる環境に適応しながら進化を続けている。一見、貝殻に閉じこもってじっとしているように思われがちだが、実は食餌のために岩礁上を広範囲に移動、海中の浮遊・遊泳、捕食のために相手の貝殻への穿孔、また防御のために外套膜で身を包むなど、結構アクティブで波乱万丈な生き方をしている。

2 貝貨 貨幣としての貝(秋道智弥)

「世界で最も古いお金は貝だった」と聞いて驚く人も多いだろう。しかし、「財貨」・「貯金」などお金に関わる漢字に「貝」の字が用いられているのは、貝がかつてお金に使われていたことを示している。貨幣の起源は、中国の殷の時代に遡ると言われている。古くは、死者の口にタカラガイを詰めて埋葬されたことから、黄泉の国への土産あるいは護符のような役割だったと考えられてきた。殷墟の墳墓では、時代が下るに従いその数が増え、約3,000年前には1,000点に及ぶタカラガイが出土するようになる。しかし貨幣には、何らかの交換活動を伴う経済的価値が付与されなければならないので、その初源には威信財的な意味合いが強かったのだろう。貝を財宝とみなす文化は中国のみならず、アフリカや西アジア、わが国の縄文時代から古墳時代にも、タカラガイ、イモガイ、ゴホウラ、オオツタノハを装飾品の素材として珍重しており、世界各地で貝をその希少性ゆえ所有することに大きな意義をもつものとみなしていた。価値を見出された貝としては、上記のほかにウミギクガイ、ナンヨウダカラ、ムシロガイ、シャコガイ、シロチョウガイ、クロチョウガイ、ツノガイなど、場所によって実に様々だ。価値づけは、入手の困難さ、貝殻の色、かたち、大きさ、丈夫さなど色々な理由があったのだろう。しかし、これらを扱う集団間で、その価値づけが共有され、納得のうえで同等とみなしうるものとの物々交換がなされ、そしてこの行為自体が、集団の良好な関係維持に寄与するものであったことこそ留意すべき点だ。

3 アンモナイト 絶滅した太古の貝(守屋和佳)

アンモナイトは、生物分類では頭足類で、形は巻貝に似るが実はイカやタコに近い生物である。頭足類は足の上へすぐ頭があり、その姿はイカそのものである。殻が外にあるのがアンモナイト、体内にあるのがイカ、殻がなくなったのがタコと言える。外見がアンモナイトに似る現生生物は、同じ頭足類の

オウムガイだが、両者には相違点が多い。このことから進化の道筋で、頭足類の祖先から最初にオウムガイが分かれ、残ったグループが後にアンモナイトやイカ・タコに分離したと推定できる。アンモナイトにとってオウムガイは遠い親戚、イカ・タコはそれより近い親戚と言える。生物は、見かけだけではわからない。

生きる化石と言われるオウムガイは、太古からほとんど変わらずに限られた環境に逃げ場を見出し現代まで生き延びている。一方アンモナイトは、生きていた三億四千万年の間に、一万に及ぶ種に分かれ大繁殖したので、化石は世界中の至るところで大量に見つかり、形のバリエーションも豊富である。しかし、いわゆる地球上五回の生物大絶滅期のうち三度を生き延びたものの、ついに四回目、中世代の終わりに恐竜などと同時に絶滅した。

4 貝塚と日本人(黒住耐二)

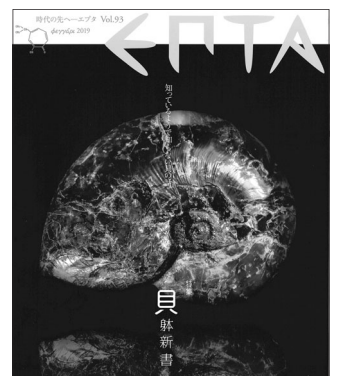
日本では約1万年前、縄文時代早期に既に貝塚形成が始まり、縄文人が積極的に海と関わりはじめた証として知られている。しかし近年、沖縄のサキタリ洞穴から約2万年前、旧石器時代に貝製の釣針や貝製品が見つかり、一部の人が既にこの頃から海に繰り出していたことが知られるようになった。縄文時代には、東京湾など遠浅の海近くに広大な干潟が発達し、この環境に棲むハマグリやイボキサゴを主体とする貝塚がムラ近くに多数作られた。また一方では、こうした食の舞台の干潟には生息しない貝、例えばベンケイガイ、タカラガイ、イモガイ、ツノガイなどが装身具専用の素材として、ムラから遠く離れた海域や島嶼部からもたらされ、石材などの交換財として利用されている。

5 日本の貝研究—先達四傑(奥谷喬司)

貝は、子どもから大人、さらに王侯貴族まで、世界中で多くの人々を魅了してきた。日本にも昭和天皇をはじめ多くの愛好者がいて、貝類学は世界各地で収集された膨大な貝類の分類を基礎に発展してきた。今なお未知の領域が多い貝類研究に情熱を傾け、その礎を築いた研究者に、江戸から昭和にかけての先達四傑、武蔵石壽、平瀬與一郎、黒田徳米、波部忠重がいた。

6 その他

- ・帝王紫 貝で染める
- ・フォトギャラリー 世界の貝
- ・貝合わせ
- ・貝の帯留
- ・法螺貝と修験道
- ・再利用される貝
- ・日本初の貝料理専門店
などがカラーで紹介され、貝好き必読、最近の私のお気に入りの一書だ。



アルカ通信 No.208

発行日 2021年1月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp